

資料

実習記録から見た基礎看護実習Ⅰにおける学生の体験と学び

金城 忍¹⁾ 嘉手苺英子¹⁾

要 約

本研究の目的は、基礎看護実習Ⅰでの学生の体験と学びを明らかにすることである。

24名の学生の3日間の実習記録から、227場面の体験と学びが導き出され、各場面から体験と学びの内容を比較検討した。その結果、基礎看護実習Ⅰにおける学生の体験と学びとして、『1. 対象者との関わりから得た体験と学び』、『2. 対象者との関わりで、学生の感情が揺さぶられた体験と学び』、『3. 対象者の言動からの学び』、『4. 対象者の様子からの学び』、『5. 対象者とスタッフの関わりからの学び』、『6. スタッフからの学び』、『7. 看護が行われている場からの学び』、『8. 実習生としての立場からの体験と学び』の8項目の学びがなされていた。

以上のことから、基礎看護実習Ⅰで学生は、【対象者との関わり】、【スタッフとの関わり】、【看護が行われている場】、そして【実習生としての立場】から多くのことを学び、多くのことに気づいていたことが明らかにされた。しかし専門知識が浅いため、対象の見つめ方が浅かったり、学生の立場で見つめていることも見られた。

Key words : 基礎看護実習Ⅰ、実習記録、学生の体験と学び

I 緒言

看護学を学ぶ学生が、看護基礎教育早期に看護実践の場を見学することは、看護への動機づけを強化する機会となることは多くの先行研究^{1)~3)}で述べられている。先行研究の実習目的と同様に、本校でも「看護が実践されている場において、看護を必要としている人々の様子や、それを支えている人々の働きを観察し、看護とは何かを体験する。」という目的で基礎看護実習Ⅰを行っている。これは入学半年後の学生が見学を中心とした実習(以下、見学実習)であり、老人介護関連施設、小児福祉関連施設、総合病院外来、訪問看護ステーションの9施設のいずれかで3日間の見学実習を行う。その後2日間の学内演習を通して、体験したことや学んだことを学生は共有する。見学実習や学内演習を通して、学生は看護職者としての学習意欲を刺激され、看護観の形成に影響していると思われる。しかし各実習担当教員は担当施設での学生の体験と学びについてのみ把握している。また発表会にて報告される体験と学びについても限られていることから、学生がどのような体験をして、その体験から看護職者としてどのような学びを得たのかについては明確に表現されていない。そこで学生は基礎看護実習Ⅰで、どのような体験をして、その体験からどのような学びを得たのか、について明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

II 研究方法

1. 研究対象

沖縄県立看護大学1年生80名の「日々の実習記録」の中で、どのような体験をし、その体験からどのように感じ・考え・気がついたのかについて記述されている24名の実習記録を対象とした。「日々の実習記録」とは、3日間の見学実習で、印象に残っている場面を記録するものである。

2. 研究方法

- 1) 「日々の実習記録」から学生の体験毎に、その体験からどのように感じ・考え・気がついたのかについてカードに書き分け、これを研究素材(以下、素材)とする。
- 2) 全素材から、学生がどのような体験をし、その体験からどのように感じ・考え・気がついたのか、についての意味内容を読み取る。
- 3) 2) で得られた各素材の意味内容をKJ法を用いて類別し、基礎看護実習Ⅰにおける学生の体験とその体験からの学びを導き出す。なお意味内容の抽出、類別は共同研究者の意見の一致をみるまで行った。

3. 用語の定義

「体験から感じ・考え・気がついたこと」とは、学生が体験した事実に対して、感じたこと、考えたこと、気がついたこととする。本研究では「日々の実習記録」を研究対象としているため、研究者が記録から学生が体験

1) 沖縄県立看護大学

したことと、その体験から感じたこと、考えたこと、気がついたことを区別し、読み取った。

4. 倫理的配慮

研究目的と研究への協力依頼を記した書面を作成した。続いて実習終了後、基礎看護実習 I を履修した80名の学生へ研究の趣旨を伝え、研究目的へ同意する学生から署名をもらった。なお分析にあたっては、学生個人が特定できないようにした。

III 結果

24名の3日間の日々の実習記録、計72枚を読み、記述内容のまとめり毎に原文をカードに書き分け、全記録から計227の素材を得た。表1に研究対象となった施設別の実習施設数、学生数、研究素材数を示す。

全ての素材から抽出した意味内容を KJ 法にて類別した結果、47項目の〈体験と体験から感じ・考え・気がついたことの内容〉が抽出された。さらにその内容を概観したところ、『1. 対象者との関わりから得た体験と学び』、『2. 対象者との関わりで、学生の感情が揺さぶられた体験と学び』、『3. 対象者の言動からの学び』、『4. 対象者の様子からの学び』、『5. 対象者とスタッフの関わりからの学び』、『6. スタッフからの学び』、『7. 看護が行われている場からの学び』、『8. 実習生としての立場からの学び』の8項目に集約された。表2に学生の体験と体験から感じ・考え・気がついたことについての意味内容と学びの内容を示す。

以下、8項目毎の分析過程について述べる。なお本文中の「 」内は、「実習施設の略語－各実習施設での学生の通し番号（○で囲む）－学生毎の通し素材番号：日々の実習記録から得られた素材」を示している。さらに〈 〉内には取り出した意味内容を示している。

1. 対象者との関わりから得た体験と学び

「老年－⑧－4：食事介助で声かけしても反応がなかったが、話しかけながらスプーンを口元に運ぶと食べた。咀嚼時一定のリズムを取っていたので、そのリズムを真

似るとジッと見ていた。飲み込むと口を開けるので、次のものをスプーンで運んだ。思ったよりも上手くいったと思う。最後まで言葉で返してくれなかったが、咀嚼のリズムや口を開けることで、何かを訴えていたように思えた。」という記述である。この場面で学生は、声をかけても反応を示さない対象者に話しかけたり、咀嚼時のリズムに注目しながら介助を進め、うまく食事介助が行えたと自己評価している。このように学生自ら援助の必要性を見だし関わったところ、対象者に良い反応が見られたという内容の素材が9あり、それらから〈学生が自力で援助の必要性を判断して行動し、対象に良い変化がみられた〉と内容を取り出した。

また「老年－⑤－9：利用者から頼まれたことをしたところ、先程と印象が異なると感じ、その理由を相手をして欲しいことをしたからと考えた。」という記述が見られた。この場面で学生は、対象者との関わりの中で、対象の変化に気がつき、その変化をもたらせたものを自らの行動を振り返って考えている。同様に対象者の変化から学生自身の行動を振り返った内容の素材が2あり、それらから〈利用者の言動の変化に気がつき、学生自身の行動を振り返った〉と内容を取り出した。

また、「小児－⑤－1：周囲の園児に微笑んで応えると、微笑み返してくれる子や恥ずかしがる子がいて、その反応が普通の人と何ら変わりはないと思った。」という記述では、園児の反応と健康な児を比較し、何ら変わらないと考えている。このように、対象者の反応から、発達段階が同じ健康な人の反応を想起し比較している内容の素材が6あり、それらから〈対象者の言動から、対象者と健康な人との共通性と相異性を考えた〉と内容を取り出した。

その他に取り出された内容として、〈言語障害を有する利用者の思いがけない反応を、その人の意思を伝える手段であると考えた〉、〈対象者と関わっていく時、自分なりの判断で行動したが、対象者の言動やカルテからその判断が誤っていることに気がついた〉、〈話を聞くだけでも利用者にとって意味があると分かり、コミュニケーションの必要性を感じた〉、〈コミュニケーション

表1 研究対象学生の実習施設数と学生数、研究素材数

	実習施設数	研究対象学生数	研究素材数
老人介護関連施設	3	11	96
小児福祉関連施設	2	5	38
総合病院外来	3	6	70
訪問看護ステーション	2	2	23
合計	10	24	227

の取り方一つで対象者の反応が違うことを実感した>、
 <バイタル測定が上手くできず、練習の必要性を感じた>、
 <実際に介助してみることで、難しさを実感した>、
 <方言など言葉の持つ力は大きいことを実感した>、
 <利用者に身内の知り合いや身内に似ていた事から親近感を抱いた>などが得られた。

2. 対象者との関わりで、学生の感情が揺さぶられた体験と学び

「老年-①-14：利用者から家族を大切にするように言われ、さらにここの生活は楽しくないので、明日にでも帰りたいと言っていた。一見楽しそうな雰囲気ホームにも、寂しさを感じている人がいる事に少し悲しく思った。」という記述から学生は、対象者の言葉から、その人の思いをくみ取り気持ちが揺れ動いた場面である。このように対象者の表現や行動から対象者の心情を想像して、気持ちが揺さぶられた内容の素材が5つあり、それらから<対象者の言動からその心情を想像し、気持ちが揺さぶられた>という内容を取りだした。しかし「訪問-②-9：昔は地位も名誉もあった人が、看護師や自分に常にお礼をいうのを見て、看護を受ける事は、他人の世話になり、プライドが傷ついているのかな、と思った。」という記述は、対象者の表現や行動を学生の位置からみつけて感情を揺さぶられている。このように学生の位置から見て感情を生じた内容の素材が8あり、それらをまとめて<対象者の状態を自分の位置から見て、感情が生じた>という内容を取りだした。

次に「小児-③-1：園児が唸り始め、手をばたつかせながら泣き出したが、何が言いたく、何をしたらいいのか全く分からず、ただ涙とよだれを拭いてあげることしかできなかった。」という記述では、対象の反応はキャッチしているが、どのように対応して良いのか分からない場面である。このように対処方法に困った内容の素材が7あり、それらから<対象者の反応にどのように対応してよいか困った>という内容を取りだした。その他に<対象者が自力でできることを介助していいのかどうか、葛藤が生じた>、<自分の存在や行為に対して対象者が認めてくれたことを嬉しく思った>という内容が取り出された。

3. 対象者の言動からの学び

「外来-⑥-16：乳癌術後、左手のむくみで通院している患者から、機械を買えば自宅でもできるが、そうすると自宅では怠ってしまうので通院していると聞き納得した。」という記述から学生は、治療に取り組む対象者の考えていることに納得している。このことは、対象者の像が広がったことと読み取った。このような内容の素材は5あり、それらから<治療に取り組む対象者の姿勢から、対象者の像が広がった>という内容を取りだした。次に、「老年-⑦-9：STによるリハで発声練習や違

う音を連続して発声させるウォーミングアップをしていたが、それはマヒで困難になった食事がしやすくなるメリットもあると聞いた。」という記述から学生は、リハビリのメリットを知ることができた、と読み取れる。このことから<体験者の説明から、リハビリの効果やメリットを知ることができた>という内容を取りだした。

4. 対象者の様子からの学び

「小児-④-6：昨日よりも慣れ、転ぶ回数が減っていた。園児は歩く事が好きで、休憩の時も歩く事ばかり話していた。この園児はいつかは一人で歩けると思った。」という記述から学生は、対象の持てる力に注目していると読み取れる。類似する内容の素材が6あり、それらをまとめて<対象者の一生懸命な様子に接して、対象者の持てる力を感じた>という内容を取りだした。

また「小児-②-6：脳性まひの園児は歩行訓練では足に力が入らず、足を交互に出す簡単な事が難しいことに気がついた。」という記述から学生は、対象者が健康な人と異なる機能の特徴を見いだしていると読み取れる。このような内容の素材は他に8あり、それらをまとめて<対象者の動きから、対象者の通常とは異なる身体機能の特徴が見えてきた>という内容を取りだした。その他に、<事前に得ていた情報から想像した患者像と現実の患者の姿にギャップを感じた>、<利用者の反応や様子について、予想と現実とのギャップに驚いた>という内容が取り出された。

5. 対象者とスタッフの関わりからの学び

「老年-④-8：入浴介助では、利用者ができる事はさせていて、危険な事は止めるように言い、なぜ危ないかを説明していた。自分でできる事をもっと安全にできるように気を使っていると思った。」という記述から学生は、対象者に対してスタッフはできることはさせるが、危険な事に対しては危険性を伝え、対象者の持てる力を生かしていたと読み取ることができる。このような内容の素材は他に6あり、それらをまとめて<スタッフは対象者の持てる力を引き出そうと関わっていることに気がついた>という内容を取りだした。また「老年-⑩-1：歩行器で歩行訓練をしている利用者の後からスタッフが屈み込んで手を添えて援助していた。またスタッフはその方の歩くペースにあわせて1、2と声をかけていた。」では、スタッフが利用者の安全を確保しながら関わっている様子を記述している。この記述から、<利用者の安全を確保しながらリハビリが行われていることに気がついた>という内容を取りだした。

このように対象者とスタッフの関わる姿や状況から学びを得ている内容が取り出された。取りだした内容として、<ケアの概念が広がった>、<対象者の思いを想像しながらコミュニケーションを取る必要性を認識した>、<利用者に安心感と親しみを与えるようなコミュニケー

シヨンの取り方の工夫がされていると思った>、<スタッフや上手な学生のやり方から、介助のポイントを発見した>、<利用者一人一人に合わせた関わりを工夫していると感じた>、<言葉以外のコミュニケーションの実際から、その重要性を認識した>、<看護師として関わる上で、対象者の思いに注目する必要性を感じた>が取り出された。

6. スタッフからの学び

ここはスタッフの行動や考えを聞き、学びを得ていた。例えば「外来①-1：内科外来では看護師はカルテ整理で忙しく、患者と接する機会は少ないと感じた。しかし患者の身体的な特徴を覚えていたのに驚き、そのような事も看護師の仕事だと思った。」という記述から学生は、対象者と関わりは少ないけれども、身体的な特徴を覚えていたことに感心している。同様にスタッフの行動から、専門家としての役割の内容を広げた素材は18あり、それらから<看護師の行動を見て、看護の概念や看護師の役割の内容が広がった>と取り出した。その他に、<スタッフのアドバイスから、相手の立場に立って援助する必要性を認識した>、<スタッフから介助のアドバイスを聞き、その通りにやってみたところスムーズに介助することができプロの実力に驚いた>、<看護師の行なう医療行為の手伝いをして、看護師として一歩踏み出したようで嬉しく感じた>が得られた。

7. 看護が行われている場からの学び

「外来⑥-26：患者は色々な場で診断・治療を受けていて、病気とは1つの場所だけでは完結しないと考えた。」という記述では、総合病院の外来で対象者が診察室だけでなく、検査室へ行ったり、他の診療科を受診している状況から考えたことと読み取れる。このような内容の素材は他に4あり、それらをまとめて<一人の健康を、家族や多くの専門職や施設が支えていることを実感した>と内容を取り出した。その他、<診察・治療の様子や医療機器について知ることができた>、<種類の異なる施設の利用者に接して、能力の違いに気がついた>、<診療科による患者や看護師の特徴が分かった>が得られた。

8. 実習生としての立場からの学び

最後に実習生としての立場からの学びが取り出された。「老年②-2：誰か話す人を探していると、3～4人椅子に座っていたので、思いきって話しかけてみた。初めは質問に頷くだけで、話したくないのかな、と思ったが、慣れてきて積極的に話してくれた。緊張して話せないのは私達だけでなく、利用者の方も話したかったが、話しかけずらかった、と分かった。」では、勇気を振り絞って対象者と関わったことが読み取れる。このことから、<自分から勇気を出して対象者と関わりを持った>と内容を取り出した。その他に<できないなりに自分

にできる事を探して実習を行なった>などの内容が得られた。

IV 考察

実習記録から学生の体験と学びについて8項目が取り出された。さらに8項目を概観すると、【対象者との関わり】、【スタッフとの関わり】、【看護が行われている場】、【実習生としての立場】と、4側面から学びを得ていた。関森ら¹⁾は学生が見学実習から気づき学んだ内容として、「対象の理解」、「看護師の姿勢・態度」、「看護援助方法の特徴」についてが、ほぼ9割を占めていたと報告している。さらに菅原²⁾も見学実習において、学生の人間理解と看護活動の理解が拡大深化できたことを報告していた。本研究結果でも素材の96%を対象者との関わりから対象理解を深めたり、実習現場の様子や状況からの学びを得ていた。また看護師やスタッフからも多くの学びを得ていた。そこで学びを得ていた4側面について考察していく。

1. 【対象者との関わり】について

学生たちは、対象者への看護の必要性を判断して行動した結果、対象に良い変化をもたらせた体験や、言語障害を有する利用者の思いがけない反応をその利用者の意思伝達の手段であると考えたり、利用者の言動の変化から、自らの行動を客観的に振り返っていた。また話を聞くだけでも利用者にとって意味がある、と考えコミュニケーションの必要性を感じたり、コミュニケーションの取り方一つで対象者の反応が違うことに気がついたり、実際に看護の対象と関わっていく中で、看護の必要性を見いだしたり、コミュニケーションの必要性を実感したり、自らの行動を客観的に見つめる体験と学びがなされていた。また対象者の言動から、対象者と健康な人との共通性と相異性を考えるなど、入学半年後の学生でも、看護師に要求される能力の一部分を有していると考えられた。

しかし一方で、学生なりの判断で行動したがそのことが対象にとってどのような意味があったのかについては述べられていないものも多く見られた。これは専門的な知識が乏しいことから対象を見つめることができず、さらに関わりを評価するための評価基準を学生が持ちえていないことに起因すると考えられた。また実際に介助やバイタル測定を行なってみたが上手くいかずに、技術のポイントを押えることや練習の必要性を実感していた。この体験と学びは、看護技術修得への動機づけにおいても重要な体験と考える。

また対象者の言動から学生の感情が揺さぶられた体験と学びでは、対象者が自らできることを介助していかどうか迷いが生じた体験があり、これは学生自身、対象者の持てる力を判断し、その持てる力を衰退させてはいけないのではないかと迷ったといえる。同様に、対象者

の一生懸命な様子から、対象者の持てる力を実感した体験と学びがなされていた。このことから入学半年の学生でも、人間の持てる力に注目させることで、それを衰退させる行為は何かを判断したり、その人の持てる力は、という問を持ちながら対象を見つめていくことができると考えられた。

2. 【スタッフとの関わり】について

ここでは、利用者の看護の必要性に対処していないスタッフに矛盾を感じた体験と学びがあり、これは学生は対象への看護の必要性を認識していることといえる。一方でスタッフの関わりから、対象者とコミュニケーションを図ったり、介助していく上でのポイントに気がついた体験と学びがなされていた。さらに看護者として関わる上で、対象の思いに注目していく必要性を認識した体験と学びを得ていた。また看護者の行動から看護の概念を広げたり、ケアの概念を広げたりと、看護専門職者として要求される能力や看護とは、について注目しながら実習を行っていたことが確認された。

しかし一方で、看護師の行為を手伝うことで、看護師として踏み出せた喜びを実感した体験もみられた。この体験では血圧値をカルテに記入したり、薬品を棚から取り出す手伝いをした体験が述べられており、入学半年後の学生が抱きやすい感情であると考えられた。

3. 【看護が行われている場】について

ここでは、一人の健康を多くの専門家や施設が支えていることや、種類の異なる施設の利用者の能力の違いに気がついた体験と学びを得ていた。また診察・治療の様子について知ることができたり、診療科による患者や看護者の特徴を知ることができた体験と学びを得ていた。これらは知識として理解するだけにとどまらず、学生は五感を通して理解を深めた体験を得たといえる。

4. 【実習生としての立場】について

ここで学生は自ら勇気をだして対象者と関わったり、

できないなりに自分のできる事を探して実習を進めたりと、積極的に実習に参加していこう、という思いを感じていた。日々行われている講義とは異なり、実習では積極的に対象と関わることで、対象から良い反応が引きだせる。このことから積極的に関わる重要性を理解したと考えられる。

V おわりに

以上、基礎看護実習Ⅰで学生たちは多くの学びや多くのことに気づいていた。しかし専門知識が浅いため、対象の見つめ方が浅かったり、学生の立場で見つめていたりしていることも多く見られた。そこで今後この体験を活かしながら看護基礎教育を受けていくことで、より専門性を有する看護職者として成長していくと思われた。

引用文献

- 1) 岩脇陽子, 藤田育子, 錦志津子, 西田直子: 早期体験学習の学習効果についての検討—見学実習における学生の記録から—, 京都府立医科大学医療技術短期大学紀要, 7: 23—32, 1997.
- 2) 出口禎子, 宮川昌子, 梶山祥子: 基礎看護学における見学実習の意義—学習の動機を高める臨床からの学び—, 東邦大学医療短期大学紀要, 10: 51—62, 1996.
- 3) 鈴木一枝, 越川良江, 根本敬子, 安立直美, 野間弘子: 看護学生の基礎看護見学実習における経験の分析, 帝京平成短期大学紀要, 6: 107—110, 1996.
- 4) 関森みゆき, 阪口しげ子: 重症心身障害児施設見学における看護学生の学び, 信州大学医療技術短期大学紀要, 25: 29—37, 1999.
- 5) 菅原スミ: 基礎看護学実習Ⅰの実習方法変更の経緯と評価—保健施設・社会福祉施設の実習の導入を試みて—, 慶応義塾看護短期大学紀要, 8: 17—22, 1998.

表2 体験したことからの学び

注) 施設毎素材数の略語は、老：老人介護関連施設、小：小児福祉関連施設、外：総合病院外来、訪：訪問看護ステーション、を表す

<体験と体験から感じ・考え・気がついたことの内容>	施設毎素材数				学びの内容 ()内は全素材数に占める割合
	老	小	外	訪	
学生が自力で援助の必要性を判断して行動し、対象に良い変化がみられた。	4	4	1		1. 対象者との関わりから得た体験と学び (25.5%)
言語障害を有する利用者の思いがけない反応を、その人の意思を伝える手段であると考えた。	1		1		
利用者の言動の変化に気がつき、学生自身の行動を振り返った。	1		1		
対象者と関わっていく時、自分なりの判断で行動したが、対象者の言動やカルテからその判断が誤っていることに気がついた。	2				
対象者と関わっていく時、自分なりの判断で行動してみた。	7	6	2		
対象者の言動から、対象者と健康な人との共通性と相異性を考えた。	1	3		2	
話を聞くだけでも利用者にとって意味があると分かり、コミュニケーションの必要性を感じた。	4				
コミュニケーションの取り方一つで対象者の反応が違うことを実感した。	1	3	1		
バイタル測定が上手くできず、練習の必要性を感じた。			1	1	
実際に介助してみることで、難しさを実感した。	4		1		
ケアに参加し、移動を伴うケアが体力を必要とする仕事だと実感した。	1	2			
方言など言葉の持つ力は大きいことを実感した。	1				
利用者に身内の知り合いや身内に似ていた事から親近感を抱いた。	1			1	
対象者が自力でできることを介助していいのかどうか、葛藤が生じた。	1	1			2. 対象者との関わりで、学生の感情が揺さぶられた体験と学び (13.2%)
自分の存在や行為に対して対象者が認めてくれたことを嬉しく思った。	2	3	2	1	
対象者の言動からその心情を想像し、気持ち揺さぶられた。	2	1	2		
対象者の状態を自分の位置から見て、感情が生じた。	3	1	2	2	
対象者の反応にどのように対応してよいか困った。	5	2			
治療に取り組む対象者の姿勢から、対象者の像が広がった。			5		3. 対象者の言動からの学び (3.5%)
体験者の説明から、リハビリの効果やメリットを知ることができた。	2				
対象者の表情から、対象者の持てる力に気がついた。	1				
対象者の一生懸命な様子に接して、対象者の持てる力を感じた。	3	3			4. 対象者の様子からの学び (9.2%)
対象者の動きから、対象者の通常とは異なる身体機能の特徴が見えてきた。	2	1	1	5	
事前に得ていた情報から想像した患者像と現実の患者の姿にギャップを感じた。			1	1	
利用者の反応や様子について、予想と現実とのギャップに驚いた。	1	1	1	1	
看護の必要性を見出したが、それに対処していないスタッフに矛盾や疑問が生じた。	2		3		5. 対象者とスタッフの関わりからの学び (21.6%)
スタッフは対象者の持てる力を引き出そうと関わっていることに気がついた。	6	1			
ケアの概念が広がった。	2				
対象者の思いを想像しながらコミュニケーションを取る必要性を認識した。			5		
利用者に安心感と親しみを与えるようなコミュニケーションの取り方の工夫がされていると思った。	5				
スタッフや上手な学生のやり方から、介助のポイントを発見した。	3				
利用者一人一人に合わせた関わりを工夫していると感じた。	7	1			
言葉以外のコミュニケーションの実際から、その重要性を認識した。	3			1	
看護者として関わる上で、対象者の思いに注目する必要性を感じた。	3		3		
利用者の安全を確保しながらリハビリが行われていることに気がついた。	2				
医師の患者への接し方から、単刀直人に伝えるコミュニケーションの取り方があることを知った。			2		
看護者の行動を見て、看護の概念や看護者の役割の内容が広がった。	1	1	16		6. スタッフからの学び (11.5%)
スタッフのアドバイスから、相手の立場に立って援助する必要性を認識した。	1	1			
スタッフから介助のアドバイスを聞き、その通りにやってみたところスムーズに介助することができプロの実力に驚いた。	1	3			
看護師の行なう医療行為の手伝いをして、看護師として一歩踏み出せたようで嬉しく感じた。			1	1	
一人の健康を、家族や多くの専門職や施設が支えていることを実感した。	1		2	2	7. 看護が行われている場からの学び (11.5%)
診察・治療の様子や医療機器について知ることができた。	1	1	5	1	
種類の異なる施設の利用者に接して、能力の違いに気がついた。	6				
診療科による患者や看護者の特徴が分かった。			7		
自分から勇気を出して対象者と関わりを持った。	2		1		8. 実習生としての立場からの体験と学び (4.0%)
できないなりに自分のできる事を探して実習を行なった。			3		
状況を観察しながら自らの行動や目標を立てて実習を行なった。			2	1	

Students' Experience and Learning on Fundamental Nursing Practicum I: A Summary of Their Practicum Records

Shinobu KINJO, R.N., M.N.S.¹⁾, Eiko KADEKARU, R.N., D.N.S.¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to appraise the students' experience and learning on Fundamental Nursing Practicum I.

There were 227 scenes identified through review of the three-day clinical experience reported by 24 students. Their learning was extensive through the following eight areas:

1. Relations with subjects
2. Feelings stirred in contact with subjects
3. Subjects' behavior
4. Subjects' condition
5. Relations between subjects and staff
6. Staff
7. Nursing practice settings
8. Trainees' roles

The study found that the students had learned many things from the relations with clients as well as with staff, from the practice settings, and from the trainees' roles. However, due to their paucity of knowledge and experience, they sometimes analyzed clients less completely or less professionally.

Key Words : Fundamental Nursing Practicum I, Practicum records, Students' experience and learning

1) Okinawa Prefectural College of Nursing